
青き英雄と異世界憚

波歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青き英雄と異世界憚

【Zコード】

Z0102X

【作者名】

波歩

【あらすじ】

いきなりタイトル変えました。ごめんなさい

かつてない最悪の被害をもたらしたイレギュラー戦争。それを終結させた英雄の1人エックスはある事情により自らの体を失ったあと、サイバー空間で世界を見守っていた。そんなある日彼は不思議な物を見つけ…

ロックマンゼロシリーズのエックスとリリカルなのはA・Sとのクロスオーバーです。原作無視や独自解釈、都合のいい設定など多々ありますのでご注意を。

あらゆる情報が流れる場所、サイバー空間。

そこはサイバー・エルフと呼ばれる生命体やレプリロイドの魂が存在する電子の世界。

おそらく現在誰にもその存在を知られていないであろうその空間に彼は居た。

「此處もまだ特に問題はない、か」

そう呟いて息を吐くのはどこか神父のような雰囲気の中性的な整った顔立ちの青年、もといサイバー・エルフ。

その青年こそ、彼の蒼き救世主とも呼ばれた伝説の英雄エックスだつた。

ある事情により自らの体を犠牲にして実体の体を無くしてからといふもののこの空間に留まり、元い世界を見守つていた。

それでもまた、世界や自分の親友の危機は見過ごせないのが彼の性格である。これまで何度も何度も歪んだ正義に立ち向かう親友を影から支えていた。

それでもまだ物足りないのか、親友に少しだけ休むと言いながらひたすらこの場所の見回りを定期的にしていたのだが、

「此處で問題が起ることなんてない、か。」

前述した通り、此處は現在普通の世界からは誰にも認識されておらず（それでも、一部の科学者達の間で此處の存在はまことしやかに

囁かれているらしい）、サイバー空間の外から問題がやって来ることはまずない。

しいて此処で発生する問題と言えば、サイバーエルフ同士の喧嘩や、此処に来たばかりのレプリロイドが時々酷く混乱状態に陥っていることくらいで、それは大抵本人達の勘違いであつたり、そうでなくとも今のエックスの力で容易く解決できるものである。

つまりこの場所、此の世界は至極平和であるということ。

「平和であることを喜ぶべきなんだろうけど…」

エックスは内心心苦しかった。いくら100年近くたつた独りで戦つたとはいえ、世界を守つてほしいと一方的に頼んでしまったような気がして、心優しい性格の彼はこの事について大いに悩んでいた。実際、親友は特に文句も言わず了承したにもかかわらず。

「… そう思い悩まずに、エックス様。」

ふと横を見ると、見回りを頼んだ自分の部下のようなものであり、元ネオ・アルカディア四天王魔将ファントムがいた。

「突然失礼いたしました。しかしエックス様の御気分が何処か優れない物と見受けられた故。」

「… ありがとうございました。でも、僕は大丈夫だから…」

「世界の行く末に関わることを気に病んでいらっしゃるのですか？」

「…」

「あなた様は過去にあの忌まわしい戦争を終結へと導いた方。途方もなく戦い続けたのですから、今此処で休息をとつていても当たり前の」とドジやごます。もっと御身を大切になさつて下さい。」

「… そうだね。考えておくよ。心配させてすまない、ファンタム」

「滅相もございません。我が喜びは我が主の御健勝。そのような言葉をおっしゃつてもらえた」と、有り難き幸せ

「ふふ… 相変わらずだね、君は」

そう言って微笑む英雄とその様子を見て何処か満足げな表情の隠将。

今日のサイバー空間での出来事の一幕であった。

第0話（後書き）

駄文な上話が進みません。orz

「これは・・・何だ?」

ある日エックスが何時もの日課である見回りをしていると、とある情報の中に光を放つ綻びのような物を見つけた。

サイバー空間はある意味情報の羅列によつて成り立つてあり、こういつた綻びやバグが生じることは珍しくない。

しかし、大抵の物はすぐに正常化するか近くにいるサイバー・エルフによつて削除されるのだが、この綻びは通常の物に比べて巨大なものでないにも関わらずその場に健在していた。

周囲のサイバー・エルフに話を聞いても要領を得ず、曰く

「女の子の声がする」

「何か寂しそうに呼びかけてくる」

等と駆けつけたばかりのエックスには意味が分からぬ。

「・・・何処かからの救難信号が此処に紛れ込んでしまったのか?」

だとすればすぐに元の世界に戻しておかなくては。

そう思いエックスがその綻びに手を伸ばし解析しようとすると、

「一.」

突如此方に向かつて綻びから光が迫る、と同時にエックスは自分の体が引っ張られる感覚を覚える。

「くつ・・・・！」

「」のまま綻びに引き込まれたらどうなるかわからない。そう思つて
いたとせ、

「滅ツ！-！」

念のため、とエックスの背後で警戒していたファントムの十字手裏
剣によつて、エックスに向かつていつた光は退けられた。

「ファントム！」

「おドガリグださいエックス様」

ファントムは綻びの前に歩いていき、

「我が主を引きずり込まんとする悪しき歪みよ、我が刃にて滅する
がよい・・・！」

と綻びに苦無を振り下ろしたとき、

「- - 誰か・・・

「- - 待つてくれファントムーそれを壊しては駄目だ-！」

突如頭の中に流れ込むように聞こえてきた少女の声に、エックスは思わず叫んでいた。

その様子に驚きながらもファントムは苦無を持つ手を下ろす。

「……いかがなされました、エックス様……？」

「……君には今の中が聞こえなかつたのかい……？」

「声……？ 声とは一体……？」

「え？」

いや、たしかに聞こえたはずだ、エックスは周りのサイバー・エルフにも確認するが、誰一人その少女の声を聞いたという者はいない。

声を聞いたとしても、サイバー・エルフからすれば聞いたというより”感じた”という方が近いようで、細かく何と言つたかまでは聞き取れなかつたそうだが……。

「エックス様……あの綻びは危険です。早急に消滅をせるべきではないかと」

「……でも、綻びから悪意や闇の気配は感じられなかつた。さつき僕を引き込もうとしたときにも引きずり込むというより、助けを求めるよつなかんじだつたんだ……」

「左様で、ござりますか」

声を聞いたこととその内容を伝えても、何処か納得のいかない顔のファントムだが、エックスはどう言われようとの綻びは邪悪な物

でないと思つていた。

それに、誰かが綻びから助けを求めていて、その声を無視できない自分がいた。

「お言葉ですがエックス様、あの綻びの中に入るといつのは非常に危険です。主が危険な目に遭うのを見過さず訳にはいきません」

顔つきから気づいたのかファントムが釘を刺す、が

「……それでも、僕は誰かが助けを求めているのを見過さることなんて、できない」

その揺るぎ無い目を見て、ファントムはもう、自分の主を止めることはできないと悟った。

「承知、いたしました……しかし、主だけを危険に晒すのは我が一生の恥。このファントムお供いたし「すまないが一人でいかせてもらうよ、ファントム」エックス様!しかし……」

加勢しようとしたファントムだが、エックスによつて遮られる。

「それに、ここから僕達一人が同時にいなくなつてしまつてはこの場所を守る者がいなくなつてしまつ。それは君にだつて分かるだろう?だから、僕一人で行かなくてはならないんだ」

「エックス様……」

「すまない、ファンタム……」

自分が綻びに向かっても例の少女の声が聞こえなかつた自分には何もできないという事を、ファンタムは理解していた。

「・・・分かりましたエックス様、このファンタム、主無きこの場所を必ずや守りきつてみせましょ！」

「ああ。頼む、ファンタム」

「ですがエックス様、どうか無理だけはなさらないよう・・・」

「分かつてゐ・・・、ファンタム」

そしてエックスは念のために、と言われ過去に使つた武装のデータと親友の得物の”「ペー””を携え、

「それじゃあ、行つてくる。あとは任せたよファンタム」

「御意」

眩い光を放つ綻びへと、その身を任せた。

「エックス様、御武運を

「がんばってね、エックス！」

自分を見送るファンタムの声やその場に居たサイバーエルフ達の応援する声を聞きつつ、エックスの意識は溶けるように無くなつた。

かくして、青き英雄は声の主が居る異世界へと導かれていく・・・
果たして英雄は、異なる世界にて、どんな物語を紡ぐのだろう・・・

第1話（後書き）

次回からよひやくなのは世界と絡んでいきます。
とは言つても予定のめどが立つてないので更新できるか不安ですが、
がんばります・・・

第2話（前書き）

遅れてしませんー！テスト期間がつらいです・・・

そして歪な関西弁に注意

「誰か家族にでもなつてくれへんかなあ」

そんな普通叶わないであろう願望を独り呟くのは車椅子に乗った少女、八神はやて。

もちろん自分の願い事を実際に口にしたからといってそれが現実になる訳でもなく

「あーーアカンアカン！弱音ゆうたつて何も変わらへん！」

と、先程の自分の発言をすぐに否定する。

それでも普段のはやての生活環境を鑑みれば、たとえ幼い少女でなくとも弱音を吐きたくなるものである。

現在八神家に住んでいるのは実質はやてただ一人のようなもので、もちろん定期的にやつて来るヘルパーが彼女だけでは困難な家事を手伝うことにあるが、飽くまでもそれは一時的な物であり、決して家族が増えるのではない。

足の検診の為外出する時に、送り出してくれる人は居ない

家に帰ってきた時に帰りを迎える、優しく声をかけてくれる人もいない

賑やかに会話を交わしながら夕食を共にする人もいない

はやては、この家で1人だった。

あるとすれば何処からか振り込まれる差出人不明の生活費であり、おかげで日々の暮らしには困らないものの先の望みが満たされる訳ではなかつた

勿論、近所に住む人達にはいつも親切にしてもらつてゐることはやてからしてもありがたかつたし、感謝もしている。

それでも今の自分に明確に家族と呼べる存在はおらず、常に孤独を感じていた。

そんな現実にもめげず、今日もはやては1日分の出来るだけの家事を終え我が家の中庭が見える窓から、車椅子に座つて夜空を眺めていた。すると、

「あつ流れ星！」

突然空に一筋の流れ星が落ちてきた。久しぶりにこれを見たはやては折角だからと先程自分で否定した願いを口にする。

「どうか私に家族が出来ますよ！」…

それは本来3回繰り返すのが正しいのだろうが、本人は願い事を言つただけで満足したようだ、

「さあて、もつとそろ寝ようかなあ～」

と就寝の準備をしようと車椅子を操作しようとした所、

「…あれ？流れ星が…」

今願い事をした流れ星の異変に気付く。なんと流れ星が段々と大きくなつてきていた！

「わ、わわわ！？あ、あれつてもしかしてこっちに近づいてるんぢゃうん！？」

そう、紛れもなくその流れ星は確実にハ神家へと接近していた。そして流れ星はすぐに目で大きさが確認できる程に近づいてきて、そして

「ひゃあ…！」

おおよそ直径2m程度のそれは、丁度はやての目の前のハ神家の庭へ落なし、眩い光を放つたのを最後にはやては気を失ってしまった

サイバー空間から意識を断つたエックスは、その間久しぶりに夢を見ていた。

自分がまだ世界を救つた英雄として人間、レプリロイドを問わず誰からも慕われ、敬われていたほんの僅かな時間。まだサイバー空間ではなく、レプリロイドとして世界で活動していた頃の出来事の夢。

世界を救つた英雄、救世主、偉大な人物、と彼を尊敬したりまたは崇拜している者が大勢いたが、本人はそれをあまり快く思わなかつた。

ただ他のレプリロイドを倒した事によって自分が英雄視されるのが心苦しかった たとえ倒したのが悪魔と謳われるレプリロイドであつたとしても、エックスからすればそれも自分と同じ“生”を持つた者で、日々戦う事に悩んでいた彼にとつてそれらの輝かしい呼び名がとても喜べる物でなかつた。

（僕は英雄なんて大層なものじゃない。：ただ、ただ僕は、人もレプリロイドも関係なく、誰とでも手を繋げる、そんな世界を…）

そこまで至つた時、エックスの意識は夢から一気に覚醒する。

「…う、此処は…？」

エックスが目を覚ました時、すぐに目に入ったのは幾つもの星が瞬く夜空だった。すぐに起き上がり、自分の今の状態を確認（主に駆動部分や武装に関して）したが、特に異常は見られなかつたので軽く息をつく。

どうやら自分は転送されたか、もしくは上から落ちてきたらしくとエックスは判断する。

そして、今自分が居る場所が自らの認識と大きく異なつていて、に気付く。

「…これは、一体…！？」

驚いて思わず周りを見渡すエックス。

「…」こんな様式の家はネオ・アルカディアはない…。それに、巡回しているはずのメカニロイド達もない…？」

ネオ・アルカディアとはかつてエックスが人類の生きる新しい楽園として創設した唯一の国のようなもので、そこで人類は皆生活に何一つ不自由することなく豊かに暮らせる場所だった。人間達が暮らす居住区があり、そこを24時間パトロールしているメカニロイドと呼ばれる機械が必ず居住区を巡回しているため、エックスが見ている景色はにわかに信じられないものだつた。

様々ま疑問を抱えつつもひとまずは自分が今居る庭の家主に会つてみよつと考え、後ろを振り返ると

「・・・え？」

車椅子に乗つた状態で氣絶している少女に気がついた。

どれくらい時間が経つたか、はやはてはその意識を取り戻すと、

「ん・・・うん・・・・。あ、あれ？」

どういう訳か自分がいつの間にかベッドで寝ていたことに気づく。もしかしたら夢だったのかとはやはては思つたが、しかし覚えているかぎり、自分はたしかにあの後氣を失つたはずだ。

何故だらう、と思考をめぐらせてみると、不意に部屋のドアが開き、

「あ・・・、」めんね。驚いたかい？」

水を入れたコップをお盆に載せて、優しそうな青年が入ってきた。
そして「」へ皿たり前のよひにほやてにコップを渡して

「気分はどうかな？正直僕にはこれぐらいの事しかできないんだ…。
・」

普通に自分の心配をしてくれて、そして残念そうに少し俯く青年の姿にはやてはひたすら困惑したが、とりあえずはお礼を言つことにした

「あの・・・、ありがとうございます」

「礼を言われる程じゃないぞ。倒れている人がいたら、助けるのが普通だらう？」

そうじつて自然に微笑む青年につられて、はやても笑う。

「あははは、やうやくね。確かに普通やつた」

「ふふっ・・・まあ君に怪我がなくてよかつた」

「あ、そりだ。名前」

「ん？」

「あなたの名前はなんていふんですか？」

はやてにそう聞かれたエックスは、この世界に来て初めて、自分の名前を名乗つた。

「僕の名前は・・・エックス、さ」

正直なところ、エックスは自分の名前を名乗るのが好きでない。特に人間に關して言えば自分が名乗るまでもなくこちらに頭を下げてくるのが、エックスにとつては苦々しかつた。
自分が何者であろうと關係なく、人間とレプリロイドの違いも気にせず、対等な立ち位置で話がしたいと切に望んでいた。
だから、でもしかし、この少女も同じような反応をするのだろうと思つていたエックスだが、

「エックス？へえ～。変わつた名前やね」

少女から返つてきたのは思いもよらない言葉だつた。

ここでエックスは先程から頭に浮かんでいる自分の予想を確かめるように少女にこう訊いた。

「・・・ここにはネオ・アルカディア居住区のどの辺りかな？」

「ネオ・アルカ・・・？何ですか、それ？」

この答えを聞いてエックスの予想は的中した。

人間が自分のことを、そうでなくともあの理想郷を知らないというのはエックスのいた世界ではありえないことだ。しかし先の少女の答えは、この世界にそんな物は存在しないと否定したに等しかつた。

ここに来てエックスは、自分が紛れも無く何処か別の世界に飛ばされたことを理解した。

「あ、あのう・・・大丈夫ですか？」

恐る恐るといった感じで少女が尋ねる。そんなに悲愴感溢れる表情をしていただろうか、と思つたがエックスは笑つて言つ

「いや・・・少し驚いただけさ、ありがと。そうだ、君の名前は何ていうのかな？」

良ければ教えてくれないかい?と言つと、少女もまた笑つてこいつ返した。

「ひの名前はハ神はやつていうんや」

かくして、青き英雄と少女は出会つた

第2話（後書き）

エックスの性格や口調はゼロシリーズ寄りにしようかと思つてます
(世界観はゼロですが)

第3話（前書き）

今回かなり無理のある設定が登場します。
こんな小説でも見てくれる人がいるのが嬉しいです。

自分が元居た世界とは違う別の世界へと飛ばされたことを理解したエックスは、とりあえず目の前の少女、八神はやてに自分の事情を説明した。

自分は人間ではなく、レプリロイドと呼ばれる限りなく人間に近い存在であること、そして人間とレプリロイドが生きている世界という事など元居た世界に関する情報を伝えた。尤も、自分がその世界で英雄と謳われている事は伏せておいた。

自分が誰かの声に呼ばれてこの世界に飛ばされた（結果的には八神家の庭に落とされた）辺りに関しては流石に信じてはくれないだろうと思っていたエックスだったのだが……

「……と、これが僕の居た世界なんだが……」

「うへん……なんやえらい難しい話やね」

「いや、信じてもらえなくともいいんだよ。かなり無理があるだろうからね……」

「いや、信じるで」

「……どうしてだい？」

「だって、エックスさんはいい人やから。嘘をついてるよつた顔じゃないからや」

エックスの心配は杞憂だったようだ。嬉しく思うと同時に自分は外から見てそんなに分かりやすい顔をしていただろうか、とも思った。そんな風に思考するエックスを尻目にはやてはおかまいなしにエックスの体に触り始める

「いや～でもこんな見た目で人間じゃなくてロボットだなんて信じられんわあ～」

「まあ僕の見た目は特に人間に近いからね。他のレプリロイドは動物をモチーフにした人が多かったかな」

「へえ～そうなんや。それにしても綺麗な目やね～。おでこのどこも赤い宝石みたいで綺麗やわ～」

正直今まで生きてきた中で自分に対しても遠慮なく接してきた人間はほほいなかつた（いたといつてもかなり昔のことである）ため、このように人間と交流することはエックスにとってとても新鮮であった。

そして話はエックスのこれからのことについてどうするかといった方に移る

「そういうや・・・エックスはこれからどうするつもりなん?」

「そうだね、この世界にレプリロイドの僕を知っている人はいないだろうからね・・・今のところ特に考えはない、かな」

「せやつたら、あの・・・」

「? なんだい?」

「その……良かつたらこの家で暮らしてもいいくん、かな？」

「いいのかい？まだ知り合つたばかりなのに……」

「ええんよ。……つちな、長い間にこの家で一人で暮らしてな、一緒に暮らす家族がいなくて、実を重つと寂しかったんよ」

「もうだつたんだね……」

「やっぱ、アカン……かなあ？」

そう言つて不安そうにこちらを見上げるはやての姿にエックスはほんの少し考えた後、微笑んでこいつ答えた

「……僕でもいいのなら、喜んで家族になるよ」

「ほ、ホント……？」

「うふ。本当に」

やつはやはやは嬉しそうに笑つて手を差し出しつつ、

「それじゃあ、これからよろしくなエックスー！」

エックスも笑つて手を差し出す

「此方からもよひしへ、はやて」

そして握手を交わし、エックスはハ神家の家族の一員となつた

かくしてはやてと家族になつたエックスなのだが・・・

「・・・えーっと、はやて?」

「あ、やつぱりレプリロイドだから食べれへんかな・・・

「いや・・・それは・・・」

彼は今早速窮地に立たされている。食事の場面で。

エックスは紛れも無くレプリロイドであり、レプリロイドには人間

と同じ食べ物を食べる能力はない。できるとしたら、内部の擬似消化器官という名のタンクに口にした物を溜めることぐらいである・・・

・飽くまでも溜めるだけ。

御多分に洩れず食事する能力を備えていないエックスは、とりあえず一通りハ神家の中の案内が終わり、基本的な家具等の使い方を説明してもらつた後、自分は食事をする必要はないことをはやてに伝えようとしたのだが

「そいういやレプリロイドって人間に近いんやから・・・あーそいういえばエックス今日の朝ご飯食べてへんかつたやろ?ならうちの分も一緒につくらなアカンな!」

「あ・・・はやて」

言つが早いかはやはては車椅子を使つているにも関わらず、凄まじい速度で台所へと消えていった。その様子をエックスは呼び止めることもできず、呆然と立ち尽くしていた。
しばらくして、はやてに呼ばれたエックスが居間に行くと、そこには人間でないエックスにも美味しいそだと分かるくらい見事な朝食が配置されていた。エックスも感嘆する。

「これは凄いね!はやはては料理が上手なのかい?」

「えへへ・・・まあ得意、かな」

「いや見事なものだよ」

そんなやり取りをしている内にいついついエックスは先程言おうと思つていた事柄も忘れて、流れるようにはやてと向かい合つ位置の椅子に座り、

「じゃあ、いただきま～す」

「？？ イタダキマスってなんだ～？」

「あー、食べる前の礼儀って感じの薬草やね。今から食べる食べ物に感謝するなんよ」

「くそ、やうなんだ・・・あ」

・・・これから食べるところタケノコの事を思って出した。

「はやで、本題に済まないんだけど・・・」

「え・・・どうしたんホックス・・・？」

そう切つ出した途端、不安そうな表情になるはやで

「・・・あ、お腹空いてなかつたん？」

「こや、やうじやないんだ」

「な、なら・・・うちの料理は食べられへん、とか・・・？」

「ええ～～～、いやホントやないんだ、ただ・・・」

「あハハ・・・」

不安そうな表情が一気に涙田に変わるとの顔はエックスの罪悪感を
これでもか、とこづくらこ抉る

そつして時は戻つて・・・

「えーっと、はやて?」

「・・・あ、やっぱリレプリロイドだから食べられへん、のかな・・・

・

「いや、その・・・」

この時ばかりはエックスは自分だけの特権である”悩む”事ができるという己の能力を呪つた。どうせこうなるくらいなら、普通にはやての料理を食べればいいじゃないか、と。

レプリロイドが先程のような自らのタンクに食べ物を溜めるという行為は構造上できれば避けたいものであるが、この少女の今にも泣きそうな瞳を見て、どれだけの者がそんな非常な行為を選択できるだろう（某紅い英雄はやりかねないかもしけないが）

その上、人一倍強い正義感と責任感を持つエックスからすれば、はやてのような幼い少女を自分の行いによつて悲しませたり、その後泣かせてしまうというのは絶対にしてはならない事と思うだろう。

・・・その瞬間、エックスの中で

はやてを悲しませないゝロボット三原則

といつた感じの方程式が成り立つたんだとか・・・

視線を感じながらも覚悟を決めたエックスは、見様見真似でフオクを持ち、ゆっくりと一番近くの皿に盛られた料理に手を伸ばす。

その一部をフォークで刺し（タマヤセワインナー）、またゆづくと口に運び、食べた。

バツチリ見られていいし、そのまま丸呑みやが歯んでおかないとマズいだらうとハックスは咀嚼する。

すねといひで、ハックスはあるじと元気づく。

（え…これは…？）

今まで感じた事のない感覚を覚えつつ、無意識的にハックスは呑く。

「…ねいし」

「ほ、本当ー？」

「うそ…ねいし。これねいしによせやー。」

思わず声を上げるハックス。その様子を見てはやての顔も綻んだ。

先程の深刻な悩みはどこやら、ハックスはどんどん料理を食べ進め、あつとこいつ間に食べ終えた

「ああ、おこしかったーえっと…」

「食べ終わった時は」ちやうめつて言ひよ

「うそ、はやて、」ちやうめつて言ひよ

「えへへ、お粗末をまでした」

朝食を終え、食器の片づけをしながらエックスは先程の自分の体の変化について思考していた。分析してみた結果、物を食べられるどころか、食べた物の熱量等の栄養をエネルギーに変換している事に気付き、かなり驚いた。同時に従来の太陽光によるエネルギーも加えて、動力源に関して何ら問題はない事も理解した。

（この事態はこの世界に来る際、体の構造に何らかの原因不明な変化が起こったものであると結論づけた。そんなことよりもエックスの頭の中は現在、食に対する感動でいっぱいである）

元指導者として人間の食生活についてもっと考えるべきだったろうか、こんなに充実感が味わえるとは知らなかつたなあ 等と一人で色々と思考していると

「エックス～口元に」飯粒付いとるよ

何処かニヤニヤした表情のはやてに指摘された。

「ありがとうはやて。・・・それにしても、とつても美味しかつたなあ、はやての料理」

「そ、そんなに？」

「うん、僕はかなり長い時間を生きてきたけど、こんなに満たされた気分は初めてだよ」

「あう・・・そんなに褒められると恥ずかしいわあ・・・でも、エックスが美味しいって言ってくれるんなら、うちも毎日つくつたるで」

「本当かい！？はやて、ありがとう！」

そういうて喜ぶエックスは何というか純粋な少年そのものであった。どう見ても戦争を終結させた英雄の振る舞いではないそれは、彼を慕う者からすれば到底考えられない姿である。（某四天王の内、隠将や賢将なら睡然とするだろう。案外妖将なんかはニヤニヤした笑みを浮かべるかも分からない。鬪将は・・・お察し下さい）そんなエックスの様子を見て変わらず笑っているはやはては、何やら幸せそうだったそうな。

そんなエックスだが、夕食時には「あんまり大きな声出したらアカンよ」とはやてに注意され、しょぼくれつつも”テーブルマナー”という、食事中に守るべきものを教えられ、以降静かに・・・料理を味わい、感想を言つたりはもちろん忘れない・・・人並みのマナーを守つて食事をするよつになつたのであつた。

第3話（後書き）

まだまだこんな感じのゆるい話が続くかと思われます。
・・・といつあえず闘将は戦闘以外あまり興味がないと思つております。

第4話（前書き）

かなり間が空いてしまい、本当に申し訳ないです。orz

時刻は午前6時、決まってこの時間にエックスは起きる。レプリロイドにおける睡眠は人間のそれとほぼ意味合いは同じである。はやてに用意してもらった布団から出て、とりあえずエックスは体をゆっくと伸ばす。・・・そのしぐさはかなり人間臭かった。

「さて、と。まずは新聞を取ってきて、あとは玄関の掃除から始めるかな」

この世界に来て、今日で3回目の朝を迎えたエックスであった。

はやての家族になつてからというもの、エックス自らはやての手伝いをしたいと言い出したのがきっかけとなり、まだ数日しか経っていないというのにハ神家の家事はかなりの割合でエックスが受け持つていて。

はやてからは別に気にしないでいいと言われたものの、エックスの性格上何もせずに世話になることは出来なかつたのだ。というかむしろ、本人は自分が今まで体験したことがない家事がとても新鮮なのだろう、普通に楽しんでやつているようである。

玄関の掃除が終わるとすぐさまりビングへ行き、朝食の準備を始める。

その手つきは未だ慣れてはいないようだが、とりあえず人並みレベルの出来映えとなつた。（余談だが、エックスがハ神家で初めて料理を作つた時の出来は目も当てられない有様だつた。この結果は彼の努力が見て取れる）

と、「いやいや、起きたくせにベッドへとやつてきた。

「あ、はやい。ねむい」

「ん～おはよひきそ、ハックス」

はやての朝の身支度を手伝い、何時もの様に席につき、手を合せ
る。

「「こだきまく」」

自分の料理の腕に自信がないハックスだが、求めるまでもなくはや
てから感想を聞く。

「うそ、やっぱりエックスの作った料理は毎日美味しくなつた
あ

「そりゃ、それは良かった。今日は昨日よつまへ出来た気がし
たからね」

他にも、味付けや焼き加減等の批評を受け、それを真剣に受け止
めるエックス。このよつまが毎朝の口課となつているハ神家であ
る。

他の家事を済ませてこると、あつといつ間に時間は過ぎ、昼食の時
間となりこれを味わう。なお、ハックスは朝食担当でありはやてが

昼・夕担当である。

昼食を終えたあと、エックスのもう一つの日課が始まる。

「それじゃ、今日も行つてくれるよ」

「気をつけてなー エックス

その日課とは、ここ海鳴市の探索・・・平たく言えば散歩である。はやてに世話になるのだから、必然的にこの町の地理を把握しておかなければならぬというのが理由だが、本音としてこの街の景色を楽しみたいというのがあつた。

さておき、散歩を始めてからまだ数日だというのに、いつのまにやら町全体にエックスの評判が広まつていた。というのも、散歩初日に迷子の子供を家まで一緒に送り届けたり、また別の人々の落し物を見事探し出したりと、散歩というよりもはや人助けをして回つたと言つた方が正確な事をしていた。

このようにしてご近所さんに顔とその誠実な性格が知れ渡り、こうして通りを歩くだけで様々な人から挨拶されるという、ある意味彼の心優しい人柄を顕著に表しているのだった。

そんなこんなで時刻は午後6時。帰り道を歩きながら、エックスはふとあることを考える。それは過去に自分の創つた理想郷、ネオ・アルカディアとの違いについてである。イレギュラー戦争によって荒廃し、限られた土地でしか生きることができなかつた人間、そしてそれを支えるレプリロイド達。人間達はかつての地球の姿へ思いを馳せ、人工的に自然を造り出し、それを愛でた。

対してこの海鳴市は、戦争もなく、造られたものでない天然の自然が広がつてゐる。人々も戦乱に怯えることもなく皆笑つて暮らせる

世界。

そして、そんな平和な世界に流れ着いた自分がいる。この事をエックスは今なお、本当に良いのだろうかと考える。

おそらく、というか確實に彼の周りの者は彼の今の状況を認めるだろ。しかし、エックスはまだ自分は休むべきではないと、そう思つている。

だからこそ、サイバー空間での声に応え、今ここにいる。

（なら僕は、力の限りあの子を・・・はやてを守り。何があつたとしても）

すっかり日が暮れて薄暗くなつた町を歩きながら、そう決心するエックス、すると突然道の真ん中で身構える。

「・・・」

暫くして、構えを解き再び歩みを進める。エックスは何者かの気配を感じて警戒していた。そして、それらが消えて後歩き始めたのである。

（少なくとも2人は居た・・・通り魔か？それとも・・・）

頭の中であれやこれやと予想を立て、最終的にエックスはこれからは自分の周り・・・はやてを含めて、警戒を強める事を決めた。

「・・・勘付かれたか。見た目より結構やるね、アレ」

「うそ、とつあんず」の事は御父様に伝えておいたか

「……闇の書に關わるゆうひであれば、即刻始末しておかないと、
ね

その日の夜、エックスはやてが話してくる中、ふとせせりがいつ
言った。

「あの、エックス……」

「ん? 何かな、はやて」

「エの……えーっと……」

「うそ……うそ……あのな、今日実まつひの誕生日なんよ
たる。

「おひへつじこころや。話していりやせ」

「うそ……あのな、今日実まつひの誕生日なんよ」

「やうだつたのかいー!？」

「わわ、そんな驚かんでも」

「驚くや、誕生日おめでといへ、ませーー。」

エックスはにっこりと笑う。それに照れながらはしゃても応える。

「えへへえ・・・家族に祝つてもらえたるにこつて、こんなに嬉しいことなんやなあ・・・。」

それからには、ひたすらエックスがはやてを祝福したり、いざという時のためにレシピを覚えておいたお菓子（夜だったため、材料は即席で）を振舞つたりと、ここ最近で一番八神家が騒がしかつたとか何とか。

気がつけばもう夜も深く、はやてが静かに寝息を立てている隣でエックスは椅子に座つてその寝顔を優しく見つめていた。

先程まで話しこんで流石に疲れたのかはやてはぐつすりと眠つている。そばらくそれを見届けた後、自分もそろそろ眠ろうと椅子から立ち上がり、何時も自分が座る庭の窓際に腰を下ろす。すぐに寝ようか、とも思ったが、夕方の事もありもう一度エックスは自分を狙つていたであろう者について熟考していた。

と、その時

「きやあああー。」

「・・・ツー。」

何処からか悲鳴が上がる。その聞き覚えのある声を聞いたエックスはすさまじい速さではやでの部屋へと戻る。その間、エックスは激しく後悔する。守るつもりなら何故傍から離れたのか、と。

「くそっ・・・無事でいてくれ！」

そしてすぐにドアを開け、名前を叫ぶ。

「はやて！無事か！・・・？！」

エックスが部屋に入つた時、部屋の中には見知らぬ男女が4人いた。その4人が驚いたようにこちらを見る。

「貴様・・・何者だ！」

「お前達こそ、はやてをどうするつもりだ！」

「我らは闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッター」内、1人の赤いポニーテールの女性が言う。

「そして私は烈火の将、シグナム。・・・主には指一本触れさせはしない」

そして何処からともなく長い剣を持ち、エックスに突きつける。どうやら相当腕が立つようであり、そして話が通じる状況でないことをエックスは悟る。

「やるしか、ないのか・・・」

仕方なしに自らの腕だけを臨戦態勢に変化させようと身構える。

「なー。ちょっと悪いんだけどよー」

・・・が赤い少女に割って入られる。そのままの体勢のまま2人は少女を見る。

「そいつ、何か気絶してるぜ?」

「うへえ・・・」

この状況下で1人、見事にのびているはやての様子に2人の間に張り詰めていた空気は一気に散るのであった。

第4話（後書き）

今回は特に取り留めがないよいつな...

あと近田中にちょっとした番外編を投稿しようと思つてます

番外編（前書き）

この話はXシリーズの時代の話になります。のでエックスの一人称に違和感があるかもしれません

時代は妖精戦争が終結し、人類の理想郷が創られるよりはるか以前、まだ人類がイレギュラーの起こす事件に怯えつつも平穏に暮らしていた時期。そして街を歩く2人のレプリロイド。

その2人とは、第17精銳部隊隊長エックスと第0特殊部隊隊長ゼロであった。

この時代は即ち、あの2人の英雄がイレギュラーハンターとして活動していた頃である。

して、この2人は何処へ向かっているのかといえば・・・それは少しばかり時を遡ること数時間前

珍しく出動命令もなく普段あまりこういった和やかな空気は滅多にない、イレギュラーハンター達の本拠地ハンターベース。そしてその中でも最高クラスとも言うべき実力者のエックスとゼロ。

先程オペレーターから呼び出されていたエックスがゼロの所へ戻つてきた

「なあゼロ、俺達宛てに依頼が届いてるんだが」

「俺達・・・? といふ事はかなり厄介な事件なのか?」

そう親友に訊かれて首を横に振るエックス

「いや、事件が起こつた訳じゃないんだ。この近くの人間達の保育所からの依頼で・・・」

「保育所だと?」

その単語を聞いた途端露骨に嫌そうな顔になるゼロ

「ん? ゼロって保育所とか子供が嫌いだつたか?」

「別に嫌いでも何でもない・・・ガキの扱いが少々苦手なのは認め
るがな」

「ならいいじゃ」只、俺達ハンターの仕事を遊びか何かと勘違いさ
れるのは気に食わん。どうせ保育所へのゲストの依頼、といった所
だろ? 「・・・うん、まあ そ う な ん だ け ど ・・・」

少し俯くエックス。だがすぐに顔を上げ、

「でも、この依頼で他の人達にハンターの仕事がもつと云わる良い
機会かもしれないだろ?」

「ならお前が行つてこい。俺にはそういう役は向かんからな

「この依頼は”2人”で行くのが条件なんだ。それに、俺は・・・
人とレプリロイドをもつと近づけさせたいんだ」

その搖り籠のない瞳を見たゼロは、観念したようにため息を吐く

「仕方ない・・・そこまで言われ切ったからには、俺もついていくさ」

「もう言つてくれるか、ゼロー。」

「フツ 礼には及ばん」

そして時は戻り、今2人は依頼主の保育所の前にいる。

「それじゃ、行くかゼロ」

「ああ」

短いやり取りを交わし、中へと入る。ゼロは後々物凄く後悔することになるのだが。

「いやーあつとこつ間だったな

「・・・」

「ん、どうしたゼロ?」

「や、りん・・・今後一切こんな任務はや、りん」

「? ?」

2人が保育所から出てきたのは既に辺りが薄暗くなつた頃だつた。エックスは笑顔だがどういう訳かゼロの表情は不機嫌を通り超して怒りすら抱いていそうな顔をしていた。いや、案外諦めかも知れない。

「お前は何で笑つていられるんだ・・・」

「え?俺は別に嫌な事をされた覚えはないぞ?」

ゼロが今の状態になつた主な原因は、やはりというか保育所にいた子供達であった。

2人が到着するやその場にいた子供達全員から殺到され、質問やら見た目の感想やらがすさまじい勢いで飛んでくるのだ。

エックスは丁寧かつ笑つてこれに答えていたが、ゼロの方はいきなり大勢から迫られ、つい反射的にゼットセイバーを取り出しそうになつていた。（実際龍炎刃一步手前くらいまでいった）

しばらく揉みくちゃにされた後、保母の注意によつてようやく解放されたゼロの顔は、既に何やら死地に赴いている最中のよつな顔だつたとか。

やつとこさ挨拶も終わり、早速ハンター業務に関する質問がスタートしたかと思いきや・・・

「ゼロさんにしつもんがありまーす」

「何だ？ 言つてみろ」

「ゼロさんはおんなのひとなんですかー？」

初っ端からド級の質問が飛んで来た。

「・・・いや、俺は男だ」

「えーでもそのかみとかきれいじゃーん」

「そーだそーだ」

「綺麗と書つかな・・・」

平然と返したように見えるが、本人はかなり気にしていたようである。

そしてトドメの一言

「ゼロさんとエックスさんって、いじびとりやつみたいだね！」

「...」

その瞬間、ゼロの体全体が石のように灰色に見えた。流石にこの発言には隣にいるエックスも苦笑いである。

質問が終わつた後もゼロの気苦労は絶えない。移動するたびに足元に纏わりつかれるは髪を引っ張られるはと、ゼロに謎の人気があるのか3分の2くらいの子供達がゼロにくつついている。ちなみにエ

ツクスの所に来る子供は別段悪戯等はしない。エックスのオーラか何かだらうか。

こうして、エックスからすればあつという間に、ゼロからすれば凄まじく長かった時間は過ぎていった。子供達は既、それぞれの親と共に帰つてゆく。

「いやーあつといつ間だつたな」

「・・・」

「ん、ぢりじたゼロ?」

「やうん・・・今後一切こんな任務はやうん」

「??」

ゼロの様子をエックスが気に掛けつつ、2人がハンターベースに戻るとしていたその時、

「エックスさん、ゼロさん」

「あ、君は」

「・・・ツー」

2人それぞれ異なる反応を示しながら振り向くと、1人の少女がこちらに駆け寄つてくる。その手には袋のようなものを持っていた。

「どうしたのかな？」

「あのね、これわたそつとおもつて

「これを俺に？」

「うん、がんばってつくったの！」

先程の保育園で子供にもつくれるような簡単な調理をする時間があつた。そのときに一緒につくったのだろうとエックスは納得した。

「ありがたく貰つておくよ」

（おい、エックス。俺達は・・・）

（いいんだよ、少しだけなら大丈夫さ。そんなことよりほら、君にも渡したいみたいだよ？）

（何？）

ふとゼロが目を下に遣ると、少女が顔を見上げていた。

ゼロこの時、少女をあまり直視できなかつた。・・・その特徴的な茶色の長髪が、彼にある人物を連想させたのだろう。

ゼロがそのまま黙つてままで、少女も渡し辛そつともじもじしている。

その様子を見かねてエックスが助け舟を出す。

「そんな顔しなくてもいいだろ、ゼロ。ああ、別にゼロは君の事を嫌いな訳じゃないんだ」

「そうなの？」

「わうわ。だから何も心配はいらないさ。わ、渡して、」

屈んで少女に話かけるエックスは妙に慣れた様子である。そして少女はやっとゼロに袋を渡す。それを貰つたゼロはただ一言返す。

「・・・礼を言ひ

その言葉を聞いて安心したように笑う少女、その笑顔がゼロには一瞬だけ”彼女”と重なつて見えた。

（・・・）

そんなゼロの心情も知らず、少女は再び駆け足で保育所の方へ戻つていいく。エックスは手を振り、ゼロは静かにそれを見送つた。

再び帰路につく2人。するとエックスがふと口を開く。

「なあ、ゼロ。」

「何だ？」

「あの子達は幸せそうだったな」

「・・・ああ」

エックスは拳を握り、続ける。

「俺達がこの街を、人間を・・・あの子達をこれからも守つていいくんだよな」

「・・・ああ、そつだな」

ゼロはフツツとシーカルに笑つて返す。

「明日からまた忙しくなるな、エックス」

「ああ、もちろんだ。この平和を守るためにー。」

こつして2人はまた、戦場へと赴いていく。

・・・久しぶりに夢を見たな。それにしても懐かしかつたな。そ
ういえばあの子もはやても料理ができるのか、僕もちょっとやって

みよつかな

エックスが料理初心者を越える悲惨な失敗をする、ほんの数時間前。この世界でエックスが迎えた2回目の朝での出来事である。

番外編（後書き）

誰が主人公か分からぬ話でしたorz一応、時代はX4とX5の間の設定で書きました。

第5話（前書き）

初めてアクセス総数を確認したら予想外のPV8000超に全力で
午後ティー吹きました

ありがとうございます！

何時もは和やかな空気が漂う八神家のリビングだが、この時ばかりは普段からは考えられない程空気が張り詰めていた。

今リビングにいるのはエックスとヴォルケンリッターの計5人。その内、このただならぬ雰囲気の元凶は青き英雄と烈火の将の2人である。

両者ともテーブルに座つていて、お互い正面から向かい合つていた。しかし、2人の様子はそれぞれ違つた。

烈火の将ことシグナムはもう露骨に警戒心MAXなのが顔を見ただけですぐ分かるくらい正面の英雄を睨みつけている。一方、青き英雄ことエックスはと、警戒や疑惑といった表情はない。だがしかし、普段のやわらかい表情は一切見られず、ただ静かに、冷静に、目の前の相手を見ていた。

そしてそれ以外の3人は、その様子をただ遠巻きに見つめていることしか出来なかつた。本来参謀役であるはずのシャマルに至つては全く動かない2人の様子にオロオロしているといった有様である。しかもこんな状態でかれこれ数時間以上経過している。

まあ、こういった膠着状態は昔の仕事柄慣れっここのエックスであつた。

（・・・この人達、人間のようだけど、さつきいきなり出した剣といい、やはり普通の人間じゃない）

この時、ほぼ同じ瞬間にシグナム達も“念話”によつて会話をしていた。

(どうだ、シャマル)

(えつと、うん。やつぱり彼は人じゃないみたい)

(ふん、やはり人の姿を模倣した人形か何かといった所か。ますます捨て置けん)

(でもよーシグナム、そいつ普通に人間みたいに喋つてたぜ?)

(それに感情を持つてゐる様にも見えた。人ではないからといって疑うどころか倒そうとするのは早計だと我は思う(が)

(からといつても不審な輩に変わりはない)

どうやら田の前の青年の対処についての会話のようである。それも、かなり物騒な類の

「あーよく寝たわ。・・・って何やこの空氣ー」

暫くして、はやてがリビングに来たことで、ひとまずこの謎の睨み合いは終了した。

「あー・・・とりあえず、皆自己紹介から始めてくれへんかな?」

未だギスギスした空氣の打破と今この現状の確認を兼ねたはやての

提案により、シグナム達から自分達の役目、そして魔法と闇の書についての説明がされる。

「信じただけないのも無理はありません。ですが……」

「ん~、信じるで」

「……ええ? ! 何故そんな軽く……」

「嘘吐いてるよう見えたしまあ……それに、田の前でいきなり本から出てきたら、そりゃ信じるわあ」

何や最近びっくりする事多いなあ、と向と無く隣に座るヒックスを見ながらひっそり

「……色々すまないね、はやく

「こちも謝りごくとも

「あの、田。その男は一体何者ですか……?」

そつまつて伸び伸びヒックスを怪訝そうに見るシグナム

「せやからそんな睨んだらアカン。ヒックスはな、うしの家族や

はやははヒックスとの出会いを簡潔に説明する

「……とまあ、こんな感じやね。なーヒックス」

「やうだね。あつがとひ、はやく。……じやあ僕も自分の事くら

「 いは説明しようかな」

次にエックスから自分の事情 - - - 主にレプリロイドと元居た世界
- - - についての説明をする

「 。。。そんな世界が本当にあるのか?」

「 でもやつぱり人間にしか見えないわ・・・」

「 つーかお前、空から降ってきて平氣なのかよ・・・」

「 ほり・・・」

感想は各自違つたりする

と、「 」ではやてが「 」の場の全員に向けて言つ

「 で、これから的事なんやけど・・・」

それを聞き、闇の書の主としての命令だと心して次の言葉を待つて
いたシグナム達だったが

「 とつあえず、一緒に暮らす家族になるんやから、まずは服とか用
意せんとな!」

「 」「 」「 」は「 」

まさかの主の一言により4人とも見事にハモリ

「 あ、そうだね。なら僕が行こうか?」

「 」 「 」 「 」 「 」 えええ？！ 「 」 「 」

普通にその提案を呑んだエックスに、4人同時にずつこけたのだった

結局はやてとエックスの2人で買い出しに行くこととなり、行く途中で色々と話し合つた所思つたよりも買う物の量が多く、服の選定にも時間がかかったこともあり（主に女性陣の分が占めている）、家に戻った時には既に日が暮れていた

はやてがリビングに戻ると、やはりというか4人とも今朝と同じ様にそこに居た

「別にそんなしんみりとせんでもええのに」

「いえ、主の断りなく勝手に歩き回るのは・・・」

「もうこれからは家族になるんやから、そんなこと気にせんでもええの！」

「は、はい・・・」

主からの命令やで〜！、と言つてシグナムの肩をポンポン叩く

「ところで主、もう1人は何処へ・・・？」

そんな様子のはやてにザフイーラが尋ねる

「ん、エックスなら今荷物を運んでもらつてゐけど・・・」

「まあ、ちよつと遅くなつちやつたかな」

「遅いでエックス♪」

玄関の方から声がしたので5人が田を遺ると、両手と背中に大量の荷物を持ったエックスが入つてくる
すさまじい荷物の量であり、エックスの身長を軽く超える

「お、お前・・・平氣なのか？その量・・・」

「え？大丈夫や、いのへりこ」

「いのへりこつて・・・」

「とりあえず、君達もはやてと一緒に整理を手伝つてくれないかな
？まだ荷物があるんだ」

「わ、わかつた」

「うそ、頼んだよ」

そう言つて再び玄関に戻るエックス

「ほんとこすげえな、アイツ・・・」

「それもそうだが、今は主の手伝いだ。早く済ませるや」

「それにしても結構な量ね・・・」

「そんじゃ、がんばろか~」

はやての一言で荷物の整理を始める一同。だが、シグナムは一人思つた

（やはり只者ではないな、奴は・・・）

未だ疑惑の晴れないようである

整理も終わり、夕食の準備に取り掛かるはやて。その隣で、1人だと大変だから、とエックスも手伝い、ヴォルケンリッターの4人もはやての指示によりそれぞれきびきびと準備をする

そして、料理を運び終えると、テーブルが普段の数倍の料理で埋め尽くされていた

「食べる時はいただきますって言つんやで。それじゃいただきまーすー！」

はやての説明に懐かしいな、と思つたエックスである

「うめえ、はやての料理おいしいな！」

「そう言つてくれるとうれしいわ~」

今日の夕食は賑やかだなあ、等とぼんやり考えるエッグスだったが、ふと床に田を遺ると

「・・・・・」

狼の姿で食事をするザフイーラを見た

「・・・・君はそれでいいのかい？」

「この姿でいた方が色々と都合がいいのでな。何、遠慮はいらん」

「せうかい、ならいいんだけど・・・」

それにしてもこの食べ物はうまいな、と食を進めるザフイーラの皿にあるのはまじりにとなくドッグフードである

本人の要望とはやての意見とはいえ、これでいいものかと思つていたエッグス。そこへシグナムから声が掛かる

「お前、物が食べれるのか？」

「うん？ そうだね、僕も同じ様に食べるけど、どうしたのかな？」

「いや、人でない人形が物を食べるのが少し不思議・・・」

「人形やないッ！」

そこまで言つたシグナムだが、途中で遮られる

「エックスは、エックスは人形なんかやない！」

「あ、主・・・」

「ちゃんと」飯だつて食べるこつと同じ様に寝るー・それに笑つたり褒めてくれたりだつてするー。」

少し涙目になりつつも言葉を続けるはやて。
その勢いに何も言えないシグナム

「だから、だからッ！人形なんて「いいんだ、はやて」・・・エックス

制止する様にはやての肩に手を置くエックス

「どんなに人に近くても、僕はやっぱり人間じゃない。・・・それは事実なんだ」

何処か悲しげに言つエックスの様子を見てはつとしたシグナム

「でも、僕が人間じゃなくとも、はやての家族なのは変わらない、そつだらうっ！」

「・・・うふ

よつやく落ち着いたはやて。そして優しく頭を撫でるエックス。
2人の姿は、本物の家族そのものであり、兄と妹の様にも見えた

夕食を終え、他の5人も眠りについた頃、エックスはいつもの場所でいつも通り夜空を見上げていた

「・・・誰だい？」

振り返りもせずにエックス

「やるな、エックス」

そう言つて近づいてきたのは、シグナムだった

エックスが横にすれ、場所を譲る。それに応じて隣に座るシグナム

「いつも夜になるとここに居るのか？」

「そうだね。・・・僕の居た世界には、こんな綺麗な自然はなかつたからかな」

「そうか」

そうして少しの静寂の後

「先程はすまなかつた」

「謝りなくていい。気にしていいない」

「だが主の信頼する者を侮辱した事に変わりはない」

そしてもう一度、すまなかつた、と謝るシグナム

そんな様子に困つた様にエックスは笑う

「僕達はこれから一緒に暮らすんだ。そんなに謝らなくてもいいんだよ?」

「・・・許してくれるのか?」

「許すも何も、僕達はもう“家族”だろ?」

「フ・・・そうだったな」

皆にも明日言つておくか、とシグナムは自然に笑う

エックスは右手を差し出す。それを見てシグナムも右手を差し出し

「ようしぐ、エックス」

「よひしぐ、シグナム」

握手を交わす2人。蟠りも解けたようだ

「そうだエックス。相談があるんだが」

「ん、何かな?」

「 ハーリロイドとの戦いにも参加できると思ったが・・・」

「 ああそりだね、確かに僕は戦闘用の「 本当か! ? 」 う、うん」

いきなり元気になつたシグナムにエッグスは驚く

「 なら一明日にでも、私と手合させ願いたいのだが! 」

「 本気で戦うのかい? 」

「 いやそういう訳ではない、だがしかし」

「 なら僕が明日、一一度よれそな物を用意しておくれ」

「 そりが、助かるエッグス。なら明日、楽しみにしておるぞ」

そういうてやたらいい笑顔で部屋に戻るシグナムの後姿は、とても活気に満ち溢れて見えたエッグスだった

「 ふう・・・明日、いや、明日から忙しくなりそうだな」

一気に5人に増えた家族の事を考え、思わず顔が綻んでしまうエッグスだった

第5話（後書き）

やはり展開と投稿スピードが遅いですがこれからがんばります

次回、初戦闘描写的の予定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0102x/>

青き英雄と異世界憚

2011年11月11日02時48分発行